

「喘息手記」 西谷 文裕 53歳

2011年10月16日

喘息発症から終息について

私が喘息を発症したのは、38歳くらいの頃だったと記憶しています。昼間は全く異常がないのに、夜寝付いてから数時間後、夜中の1時、2時頃咳が出始めるのです。どうしたのかな、と思いながらも、そのうち1時間以内位に咳も止まるので、深く考えず時間が過ぎてゆきました。これが、喘息の始まりとは思っていませんでした。

症状が悪化していったのは、45歳位だったと思います。夜に急に息が出来ないくらいの苦しさにおそわれ、30分くらい四つんばいになり、苦しさに耐えていました。それが、頻繁に起こるようになりやっと病院にも行き、喘息であることを自覚したのでした。喘息の薬はあります。最初は気管を拡げる吸入薬でした。苦しくなるとこの吸入薬を慌てて吸うのですが、吸い過ぎてしまうことがあります。1回吸ったからといって、即効果が表れるものではなかったからでした。そのうち、この吸入薬は、心臓に良くないと知り、あまり使いたくないと考えるようになりました。また、この薬は喘息を起こさないようにする効果は有りませんでした。あくまで、喘息発作が起こったときの対症治療薬でした。

次に使ったのは、ステロイド系の吸入薬でした。わたしの友人に医者になっている者がおり（東京医科大出身、徳島大で研修）その医者の薦めで使用するようになりました。この薬の名前は忘れてしまいましたが、いまでは喘息治療の第1次選択となっているようです。新聞にも書いてありました。（読者からの相談に答える形です）この吸入薬はステロイド系ではあるが、肺以外には吸収されないので、全身に対して副作用的なものは心配いらぬ、と。また、定期的に吸入することで喘息発作自体が起こらないようになる、と。

確かに、この薬の効き目は素晴らしいものでした。嘘のように発作が起これなくなり、全く健康な人と同じ生活が出来ました。しかし、不安がよぎります。この薬を使い続けていいのだろうか。使い続けた場合、だんだんと効かなくなるのではないだろうか。何年も使い続けた場合、副作用は本当に出ないの

だろうか。50歳になろうとする頃には、半分あきらめの心境になっていました。これを使わないと、普通の生活は出来ないのだから使い続けるしかない。そのためには、少々寿命が縮まってもしかたないな。そう思うようになっていました。

そのころ、妻がネットで見つけたのが、松本先生の治療方法でした。漢方薬を使い、根本的に喘息を治す、と書いてあります。私は、医学を勉強したことは有りませんので、先生の理論は読んでよく分かりませんでした、しかし、体験談等を読むと、実際良くなっている、と書いてあります。ステロイド系の吸入薬に不信を覚えていた私は、先生の医院の扉を開く事にしました。正直、駄目でもともとと、思っていました。先生のパワーに圧倒されながらも、『わたしが、必ず治してあげます』との言葉を信じ、漢方薬を飲むだけという、治療に変えてみました。おっかなびっくりです。吸入薬を完全に吸わなくしたのです。最初の1週間は恐怖との戦いでした。この漢方薬が効いていなければ、またあの喘息の苦しみが襲ってくるのです。なんとかその恐怖に耐え、1ヶ月2ヶ月と月日が過ぎていきました。そうして、あれからもう4年が過ぎました。

今も漢方薬は用心のため、飲み続けていますが、あれ以来発作が起こったことは1度もなく、たまに夜に咳がでることはありますが、全く普通の生活を送っております。私は思います。なぜ、この治療法が世間に広まらないのでしょうか。漢方だからなのでしょう。大学の偉い先生の権威が失墜してしまうからなのでしょう。薬が売れなくなってしまうからなのでしょう。そんな、うがった考えが思い浮かんでしまいます。とにかく、発作はなくなり、副作用の心配もいらないのです。私の友人である医者は言います。『アレルギーである花粉症や喘息は症状を抑えることはできても治すことは絶対出来ない』と。本当にそうでしょうか。じゃあ、治ってしまった私は何なんのでしょうか。私の経験を振り返って、文章にしてみました。1番思うことは何故先生の治療法が、あまり知られていないのだろうか、ということです。ここに、喘息が治った人間が一人実際にいるにもかかわらず、松本先生の治療法がもっともっと世間一般の注目を浴び、学会でも認知され、喘息治療のスタンダードとなることを願ってやみません。いまでも、喘息で死亡する人がいる、と聞きます。信じられない思いです。そして、残念でなりません。

拙い文章ですが、松本先生の治療方法が広まり、同じアレルギー喘息で苦しむひとが1人もいなくなる日を信じて、その一助になればと思いながら筆をおくこととします。